

2007 年 6 月号 目次

【トピックス】

第 14 回 衛生研究所施設公開を終えて	1
平成 18 年度 クラミジア抗体検査のまとめ	2
麻しん情報(その 2)	4
遺伝子組換え食品の検査	6

感染症発生動向調査

感染症発生動向調査委員会報告 5 月	8
感染症発生動向調査における病原体検査 5 月	11

検査結果

由来別病原菌検出状況 5 月	12
----------------	----

情報提供

衛生研究所 WEB ページ情報(その 39)	13
------------------------	----

第14回 衛生研究所施設公開を終えて

第14回衛生研究所施設公開(安全・安心な暮らし 衛生研究所展)を平成19年6月8日(金)に実施しました。

当日は晴天に恵まれ、市民の皆様を中心に約100人の熱心な参加者がありました。

今年度は、昨年度と同様に実験室、廊下等のスペースにパネルの展示及び体験コーナーを設け、新たな企画としてはミニセミナーを開催しました。午前の部は「最近の食品苦情事例について」、「食中毒について」、午後の部は「おいしい水」、「鳥及び新型インフルエンザ対策について」のテーマで職員がお話しし、午前・午後の部ともに50名程度の参加者があり、活発な質疑応答がありました。

参加者の多くの方々には、今回の施設公開を通して、衛生研究所が日常生活に密着した検査や調査研究を行っている施設であることを理解していただけたと思います。

ご参加いただいた皆様、健康福祉局をはじめ関連機関の皆様、ご参加、ご協力をいただき、ありがとうございました。



【 第 14 回衛生研究所アピール委員会 】

平成18年度 クラミジア抗体検査のまとめ

近年、特に若年者の中でクラミジアなどの性感染症が流行しており、その予防啓発の一環として平成13年度よりHIV検査と合わせてクラミジア・トラコマチス抗体についても無料匿名検査を実施しています。18年度は7か所(青葉、緑、保土ヶ谷、鶴見、南、中、西)の福祉保健センターとAIDS市民活動センターで週1回行っている夜間健診、結核予防会で行っている土曜健診の計9か所で採取された血清を試料とし、「ペプチドクラミジアIgA及びIgG」を用いて検査を実施しました。

クラミジア抗体検査は感染している可能性について調べるスクリーニング検査です。IgAもしくはIgGが陽性の場合、医療機関を受診することを促しています。受診者に結果を返却する際には以下の内容をお知らせしています。

クラミジア検査について

この検査は、感染している可能性があるかどうかを調べる1次検査です。

1次検査では、感染していなくても何人かの方は感染の疑いが出ることがあります。病気がどうか診断するには医療機関で確認検査を受診することを勧めています。

今回の検査結果は、採血日より3週間ほど前の状態を表しています。

感染後、血液中のクラミジア抗体が増加して、検査で判定可能になるまでに約3週間かかります。

検査はIgAとIgG、2種類の抗体を測定し、感染している可能性を判定しています。

< 判定 >

IgA (-)	IgG (-)	クラミジアの感染は心配ありません。 ただし、何かしら症状がある場合は医療機関を受診してください。	
IgA (+)	IgG (+)	クラミジアに最近、感染した可能性があります。	医療機関での確認検査をお勧めします。
IgA (-)	IgG (+)	感染初期の可能性もあるし、以前に病気にかかったことを表しているのかもしれない。 クラミジアに感染した場合、治療後も長期間、IgGは陽性(+)となります。	
IgA (+)	IgG (-)	感染のごく初期の可能性が考えられます。	

平成14年度から18年度までのクラミジア抗体検査受診者数と陽性者数、陽性率を表1に示しました。17年度は土曜健診でのHIV即日検査の導入により受診者が減少しましたが、18年度は16年度と同程度の受診者が得られました。

表1 14～18年度の受診者数と陽性者数と陽性率

	受診者数(人)	陽性者数(人)*	陽性率(%)
14年度	1,767	517	29.3
15年度	1,957	561	28.7
16年度	2,140	595	27.8
17年度	1,689	501	29.7
18年度	2,117	717	33.9
合計	9,670	2,888	29.9

* IgA、IgGいずれかが(±)以上のものを陽性とした

18年度の男女別受診者数、陽性者数と陽性率を示しました(表2)。前年度同様、受診者数は男性が女性の約2倍と多く、陽性率は女性の方が高い結果でした。

表2 18年度 男女別受診者数、陽性者数と陽性率

	受診者数(人)	陽性者数(人)	陽性率(%)
男性	1,392	408	29.3
女性	725	309	42.6
合計	2,117	717	33.9

18年度の年代別受診者数と陽性者数及び陽性率について図に示しました。20歳代、30歳代の受診者が多かったですが、陽性率は年齢が上がるにつれて上がる傾向が得られました。

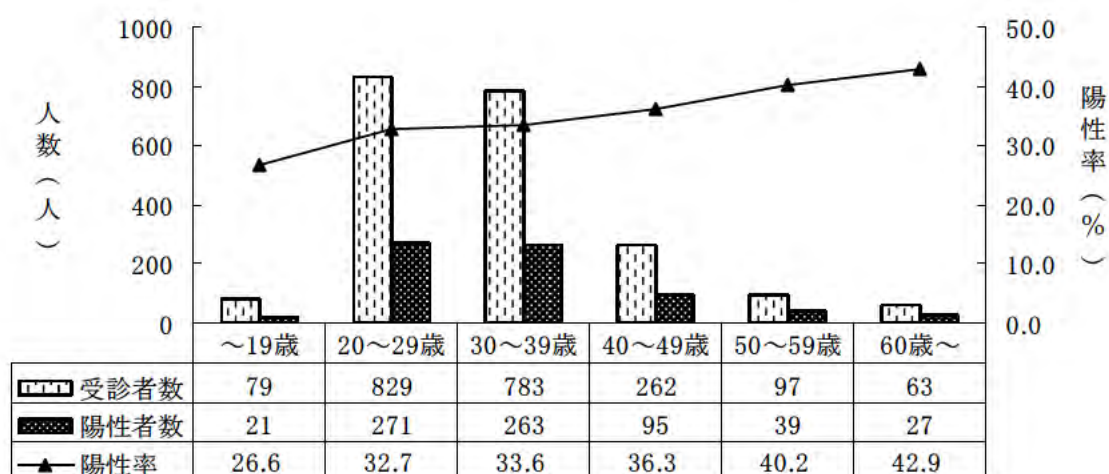


図 18年度 年代別 受診者数と陽性者数、陽性率

【 細菌担当 】

麻疹情報(その2)

2007年4月上旬から、横浜市でも定点医療機関での麻疹患者の報告が続いています。幼稚園、中学校、高校、大学、専門学校で休校等が、また、高校や大学では集団発生もみられています。

麻疹(成人麻疹を除く)の流行状況については、全国で約3000か所、横浜市では84か所の小児科診療を行っている指定届出医療機関(小児科定点)からの報告により、把握しています。

成人麻疹(15歳以上)の流行状況については、全国で約450か所、横浜市では3か所の基幹定点(内科と小児科を持つ300床以上の病院)からの報告により把握しています。

小児科定点および基幹定点からの患者報告は、月曜日から日曜日までの1週間ごとに行われており、1週間単位での集計結果を、ホームページ等で、公表しています。

各区別の情報は「横浜市感染症発生動向調査週報一覧 (横浜市衛生研究所)

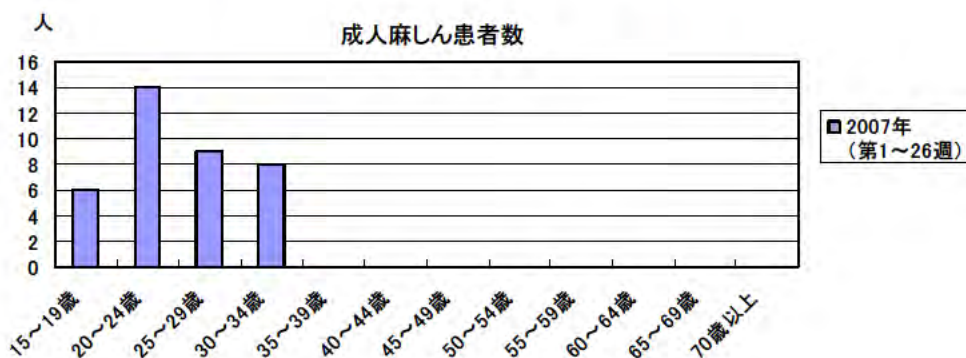
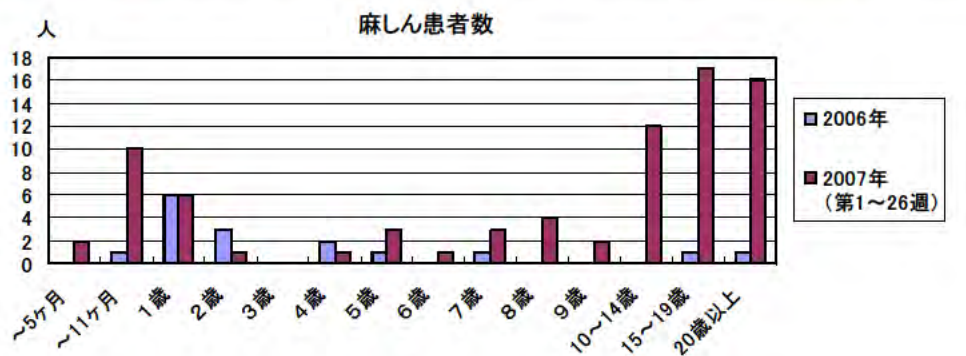
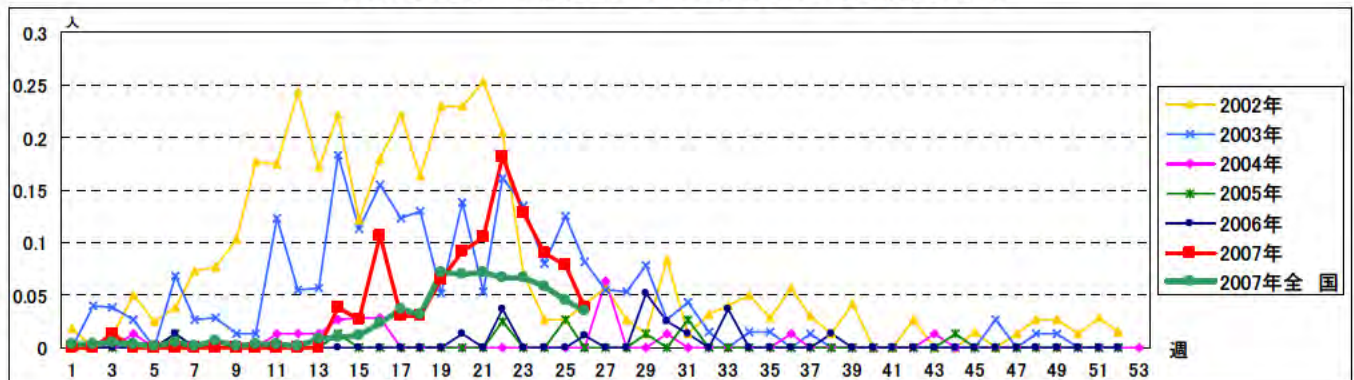
(http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/topic_inf/kansen_khama.html)」をご覧ください。

<感染症発生動向調査による患者報告数>

横浜市の麻疹定点当たりの患者数の推移、麻疹、成人麻疹患者数をグラフに示しました。

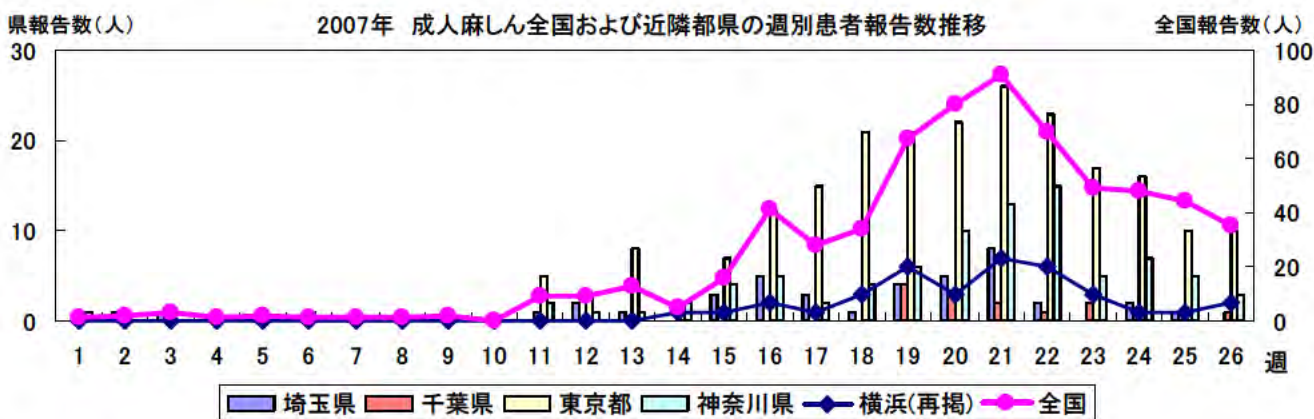
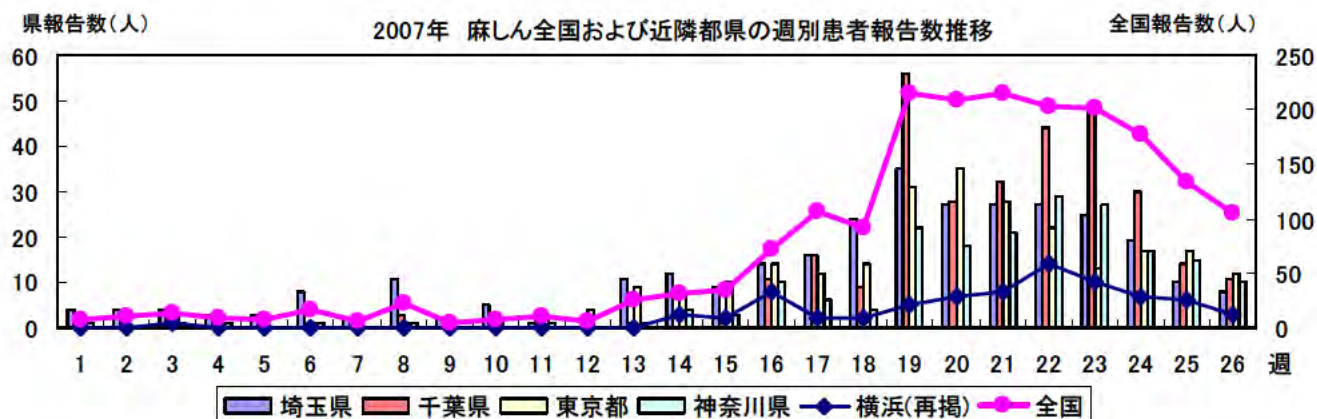
麻疹は第14週から報告が続き、2007年の累計報告数は78と、2006年の年間報告数16の4.9倍になりました。成人麻疹は2007年の累計報告数は37です。なお、2006年は成人麻疹の患者報告はありませんでした。

横浜市および全国の麻疹定点当たりの患者数の推移



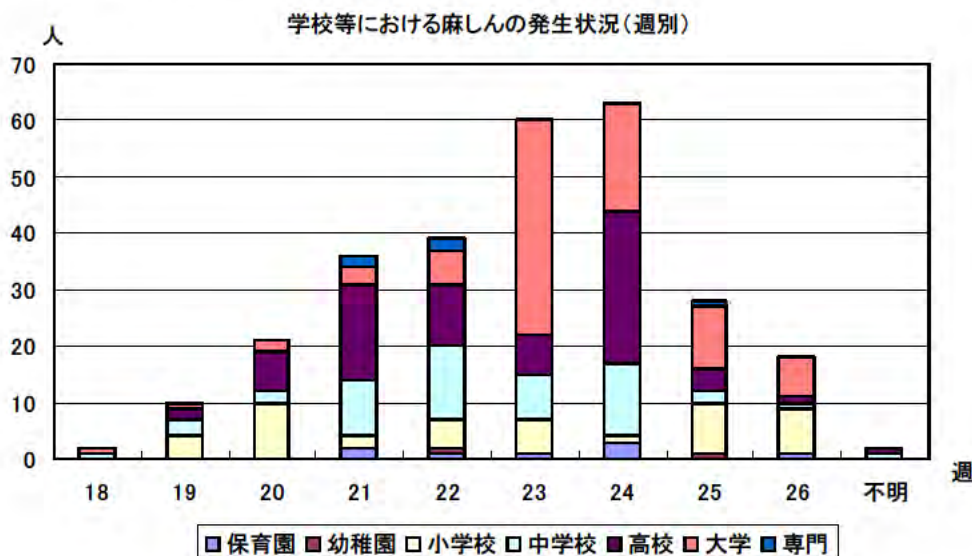
<近隣都県の週別患者報告数>

麻しんおよび成人麻しんの全国、近隣都県の週別患者報告数をグラフに示しました。
麻しんは、全数報告ではなく、定点からの報告のため、実際の発生数は、もっと多い可能性があります。



<横浜市内における麻しん患者施設別発生状況>

2007年7月6日現在、6月28日から発生状況の報告はなく、横浜市内の麻しん患者が発生した施設数は計121か所で、患者数は計279人となっています。施設数では高等学校が38か所(31.4%)、患者数では大学が88人(31.5%)と多くなっています。



遺伝子組換え食品の検査

平成19年4～5月にかけて、食品専門監視班及び福祉保健センターが収去した計43検体について、遺伝子組換え食品の検査を実施しました。

遺伝子組換え食品は、内閣府にある食品安全委員会で安全性に問題ないと判断され、承認されたものが国内に流通します。検査は、承認済みのものについては定量検査（食品中に遺伝子組換え品種がどのくらい含まれているかを調べる検査）を行います。一方、未承認のものについては定性検査（食品中に遺伝子組換え品種が含まれているかを調べる検査）を行います。今回は、承認済みのラウンドアップ・レディー・大豆並びにEvent176、Bt11、T25、Mon810及びGA21トウモロコシの定量検査と、未承認のBt10トウモロコシ及びBtコメの定性検査を実施しました。

1 定量検査

大豆加工品（豆腐やきな粉など）12検体及び大豆穀粒3検体についてラウンドアップ・レディー・大豆の定量検査を、また、トウモロコシ粉砕品1検体についてEvent176、Bt11、T25、Mon810及びGA21トウモロコシの定量検査を行いました。その結果、いずれも混入率は5%以下¹であり、違反検体はありませんでした（表1～3）。

表1 大豆加工品におけるラウンドアップ・レディー・大豆の定量検査

品名	検体数	混入率5%を超える検体数
豆腐	7	0
きな粉	3	0
枝豆（冷凍食品）	2	0

表2 大豆穀粒におけるラウンドアップ・レディー・大豆の定量検査

原産国	検体数	混入率5%を超える検体数
アメリカ	3	0

表3 Event176、Bt11、T25、Mon810及びGA21トウモロコシの定量検査

品名	検体数	混入率5%を超える検体数
トウモロコシ粉砕品	1	0

¹ 安全性審査を経た遺伝子組換え食品は、混入率が5%を超えると表示義務が生じ、「遺伝子組換え」である旨の表示をしなければなりません。一方、5%以下なら表示義務はなく、「遺伝子組換えではない」等の表示をすることもできます（ただし、書類等で確認ができること、意図的に遺伝子組換え食品を混入していないことが前提になります）。そのため、安全性審査を経た遺伝子組換え食品の検査では、混入率が5%を超えているかどうかを調べることになります。

2 定性検査

原材料表示にトウモロコシの記載がある食品18検体(菓子類、冷凍食品など)についてBt10トウモロコシの定性検査を、また、コメ加工品10検体(米粉、もち粉、ビーフンなど)についてBtコメの定性検査²を行いました。その結果、いずれも不検出であり、違反検体はありませんでした(表4、5)。

表4 Bt10トウモロコシの定性検査

品名	検体数	検出数
菓子類	15	0
ミックスベジタブル(冷凍食品)	1	0
スイートコーン	1	0
トウモロコシ粉碎品	1	0

表5 Btコメの定性検査

品名	原産国	検体数	検出数
米粉	日本	4	0
もち粉	日本	2	0
	タイ	1	0
ビーフン	タイ	1	0
ライスペーパー	ベトナム	1	0
ケーキミックス粉	タイ	1	0

² Btコメの定性検査については、検査法が平成19年1月に厚生労働省から示されたことに伴い、今回の検査から開始しました。

< Btコメについて >

平成18年9月、欧州に輸入されている中国産のコメ加工品(ビーフン等)から、遺伝子組換えコメを検出したとの調査結果が環境保護団体から発表されました。それに伴い、9～12月かけて厚生労働省(検疫所)で中国産のコメ加工品を検査したところ、154件中6件(ビーフン5件、もち粉1件)からBtコメが検出されました(厚生労働省発表、19年1月26日)。

Btコメは、害虫抵抗性を持つように遺伝子を組換えたコメの品種で、日本では安全性未審査のため、製造、輸入、販売等が禁止されています。しかし、検疫所での輸入時の検査においてBtコメの混入が認められたことから、国内に流通している可能性もあるため、今後も検査を実施していく予定です。

【 食品添加物担当 】

感染症発生動向調査委員会報告 5月

《今月のトピックス》

- 東京都、埼玉県、千葉県に続き、横浜市でも麻しんが流行中
- インフルエンザは、全国でもほぼ終息に向かう
- 2006年の全国のHIV/AIDS報告数は過去最高で、3年連続で1000件を超えた

【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点:84か所、内科定点:55か所、眼科定点:15か所、性感染症定点:26か所、基幹(病院)定点:3か所の計183か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の13感染症とを報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計139定点から報告されます。

平成19年4月23日から平成19年5月27日まで(平成19年第17週から第21週まで。ただし、性感染症については平成19年4月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

＜インフルエンザ＞

定点あたり患者報告数は、第18週に0.61と流行期の目安である1.0を下回り、第21週は0.05と、横浜市における流行は終息しました。全国でも、第20週で1.20と、ほぼ終息に向かっていきます。

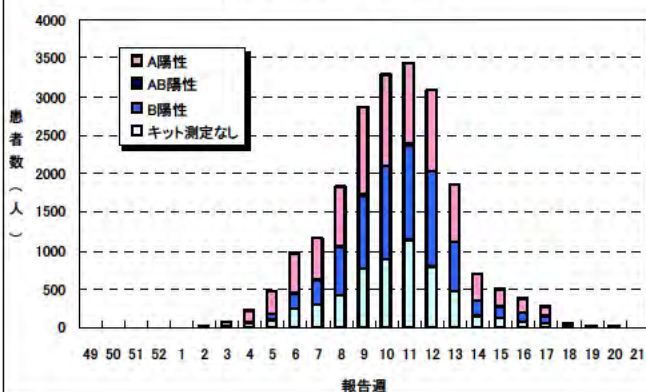
横浜市内の病原体定点の検体からの、横浜市衛生研究所における第21週までのウイルス分離・検出数は、Aソ連型 13、A香港型 61、B型 58となっています。全国の地方衛生研究所からの報告によれば、5月29日現在、Aソ連型367、A香港型2079、B型1742です。

今シーズンは、過去5シーズンと比べて一番遅い第4週から流行期に入り、規模としてはさほど大きくありませんでしたが、ピークが第11週と3月中旬で、定点あたり1.0を下回ったのも第18週と5月に入っており、過去20年と比較しても、一番遅い時期の流行となりました。大きな流行のあった2004-2005シーズンも、流行開始は第3週と遅かったのですが、ピークは第7週でした。また、終息前に、例年に比べて少し高めの状態がしばらく続いたのも、今シーズンの特徴だったようです。全国では、5月中旬でも学級閉鎖等の報告があがっています。こうしたことから、インフルエンザについては、1年を通して発生の状況を見守る必要があると思われます。

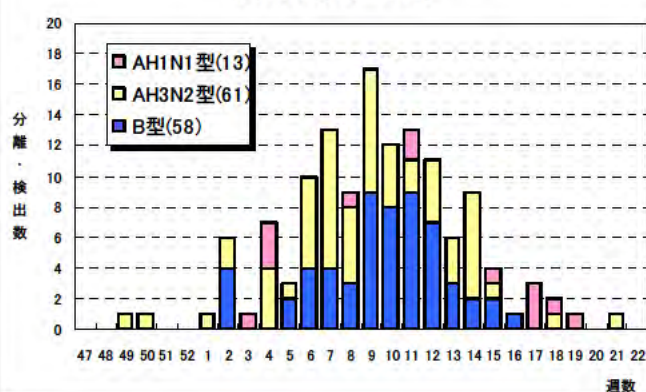
平成19年 週一月日対照表

第17週	4月23～29日
第18週	4月30～5月6日
第19週	5月 7～13日
第20週	5月14～20日
第21週	5月21～27日

横浜市内定点医療機関のインフルエンザ報告患者における迅速診断用検査キットによるA型・B型の判定



定点ウイルス調査分離・検出状況 (2006/2007シーズン)



インフルエンザ迅速診断キットの結果をご報告いただいた集計と、横浜市衛生研究所での検査結果を示しました。

< 咽頭結膜熱 >

第17週には定点あたり0.44と昨年同様に高めの値でしたが、その後例年とほぼ同じレベルに低下し、第21週は0.32でした。しかし区別では、定点あたり2.5と相変わらず磯子区での発生が目立ち、港北区でも1.1と先月同様高い値です。2003年と2004年は、5月末頃から増加し大きく流行しているため、今後の動向が注目されます。

< A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 >

第3週に急に増加し、その後、高いレベルで増減を繰り返しています。第21週は定点あたり2.50でした。神奈川県(横浜、川崎を除く)は2.38、川崎市は3.39でした。区別では、都筑区での発生が目立ち、第17～21週で全て警報レベルの4をこえており、特に第17週は18.3とかなり高い値でした。また、第21週は、瀬谷7.0、都筑6.3、栄5.0、青葉4.7と、4区で4以上でした。全国でも、過去5年間の同時期と比較してやや多い状態が続いていて、第20週は定点あたり2.55です。引き続き注意が必要と思われます。

< 伝染性紅斑 >

例年に比べて高めの値が続いていましたが、第16週頃より例年並みの値となり、第21週は定点あたり0.59でした。神奈川県(横浜、川崎を除く)は0.73、川崎市は0.88と、どちらも横浜市より高めです。

全国では、増減はあるものの、過去5年間の同時期と比較してかなり高い値が続いていて、第20週は定点あたり0.78でした。例年、6月頃が一番高いようなので、引き続き動向には注意が必要です。

< ヘルパンギーナ >

昨年は、この頃に立ち上がりが見られました。今年は第21週は定点あたり0.07と、まださほどではありませんが、全国では第20週で0.20と少し増加し始めています。例年、6月に入り急に増加してくるため、これから注意が必要です。

< 麻しん >

現行の感染症生動向調査では、2001年をピークに減少、2004年に激減、2006年は、全国で520人、横浜市では16人という年間患者報告数でした。しかし、2006年の4～6月には、関東を中心とした麻しんの流行が報告されました。2007年に入って、全国的には過去2年と同様に低い状態が続いていますが、関東での発生は継続していました。

4月に入り、埼玉県や東京都を中心として、麻しんが流行してきました。ゴールデンウィーク後は、さらに流行が拡大し、東京都では、高校や大学での集団発生や、休講等が続きました。横浜市でも、第14週以後報告が続いており、2007年第21週までの累計報告数は、38となり、大学の休講や、中学校の臨時休業等が行われています。成人麻しんも、昨年は報告がありませんでしたが、今年は累計報告数が18となっています。未罹患患者、未接種者への予防接種を呼びかけていますが、流行はまだしばらく続くと思われるので、拡大防止へ向けて、引き続き注意が必要です。最新の情報については、横浜市感染症臨時情報《麻しん》をご覧ください。
(http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/report.html)

感染症発生動向調査においては、麻しんは小児科定点から報告され、届出基準では、15歳以上は除くとなっており、一方、成人麻しん(15歳以上)は基幹定点(病院)から報告されることになっています。ただ、成人麻しんの患者が、基幹定点ではなく内科・小児科を受診する場合もあり、その場合は、小児科定点の報告に記載されてきますので、その分も計上しています。

< マイコプラズマ肺炎 >

3か所の基幹定点医療機関からの報告に基づいているため、総数で比較しました。昨年はかなり多く、年間で92人の報告がありました。今年に入ってからは、今までに26人の報告がありました。第17～19週に各2人ずつ、第20週には6人と、このところ、報告が目立っています。全国での報告は、過去5年間と比較すると多い状態が続いており、引き続き今後の動向に注意が必要と思われます。

< 性感染症 >

性感染症は、診療科でみると産婦人科系(産婦)の11定点、および泌尿器科・皮膚科系(泌・皮)の15定点からの報告に基づいて集計されています。4月は、特に大きな変化は見られていません。

さて、5月22日に厚生労働省エイズ発生動向委員会から、2006年エイズ発生動向の概要について発表がありました(速報値については2月の本報告でお知らせしています)。2006年に新たに報告されたHIV感染者は952で前年の832より増加し過去最高となり、AIDS患者も406と前年の367より増加し過去最高となりました。

なお、6月1日～7日は、HIV検査普及週間で、これを機会に国や都道府県等は取組を強化しています。

【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点:8か所、インフルエンザ(内科)定点:5か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所、の計17か所を設定しています。検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

衛生研究所から

< ウイルス検査 >

2007年5月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点から38件(咽頭ぬぐい液)、眼科定点から3件(結膜ぬぐい液)、基幹定点2件(髄液、便各1件)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は気道炎28人、胃腸炎3人、リンパ節腫脹・筋肉痛1人、発疹1人、結膜炎1人、眼科定点は角結膜炎3人、基幹定点は髄膜炎1人、胃腸炎1人でした。

5月10日現在、小児科定点の気道炎患者それぞれ1人の検体からインフルエンザウイルスAH3型、インフルエンザウイルスAH1型、アデノウイルス2型が分離されています。また、リンパ節腫脹・筋肉痛の患者検体からはインフルエンザウイルスAH3型が分離され、さらに、PCR検査でRSウイルスとインフルエンザウイルスAH1型が検出されました。PCR検査ではこのほかに小児科定点の気道炎患者4人の検体からヒトメタニューモウイルス、1人の検体からRSウイルス、基幹定点の胃腸炎患者検体からノロウイルスが検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

< 細菌検査 >

5月の感染性胃腸炎関係の受付は5菌株で毒素原性大腸菌が1件検出されました。呼吸器系検体の受付は1件でマイコプラズマおよびオウム病クラミジアは検出されませんでした。

感染症発生動向調査における病原体検査 5月

感染性胃腸炎		2007年5月			
検査年月	5月		2007年1～5月		
定点の区別	小児科	基幹	小児科	基幹	
件数	0	5	0	37	
菌種名					
サルモネラ					
腸管病原性大腸菌				3	
毒素原性大腸菌		1		3	
組織侵入性大腸菌					
腸管出血性大腸菌					
腸管凝集性大腸菌					
黄色ブドウ球菌					
カンピロバクター					
不検出	0	4	0	31	

呼吸器感染症等		2007年5月			
検査年月	5月		2007年1～5月		
定点の区別	小児科	基幹	小児科	基幹	
件数		1	9	2	
菌種名					
A群溶血性レンサ球菌	T3				
	T4		2		
	T6		1		
	T12		1		
	T 型別不能				
B群溶血性レンサ球菌			1		
G群溶血性レンサ球菌					
インフルエンザ菌					
パラインフルエンザ菌					
黄色ブドウ球菌					
髄膜炎菌				1	
不検出		1	4	1	

T(T型別): A群溶血性レンサ球菌の菌体表面のトリプシン耐性T蛋白を用いた型別方法

【 細菌担当 】

由来別病原菌検出状況 5月

2007年5月

菌種名	分離菌株数					
	ヒト		環境		食品	
	5月	1-5月	5月	1-5月	5月	1-5月
コレラ O-1						
O-1以外			3	5		
赤痢菌 A						
B	2	2				
C						
D	2	4				
その他		1				
チフス菌						
パラチフス菌		1				
その他のサルモネラ						
O4群				1		
O7群						
O8群						
O9群						
O3,10群			1	1		
その他						
腸管病原性大腸菌		3				
毒素原性大腸菌	1	8				
組織侵入性大腸菌						
腸管出血性大腸菌	3	7				
腸管凝集性大腸菌						
腸炎ビブリオ						
黄色ブドウ球菌	1 ^{*1}	11				
カンピロバクター	4 ^{*2}	6			1	3
ウェルシュ菌	9 ^{*3}	23				2
A群溶血性レンサ球菌		4				
B群溶血性レンサ球菌		1				
G群溶血性レンサ球菌						
レジオネラ菌	1	2				
インフルエンザ菌						
その他		1	2 ^{*4}	2		
取り扱い件数	171		11		75	

*1 メチシリン耐性黄色ブドウ球菌

*2 *C.jejuni*による集団食中毒事例

*3 Hobbs型別不能および13型による集団食中毒事例

*4 インコの腸内容物から *Chlamydophila psittaci* (オウム病クラミジア) 遺伝子をPCR法にて検出 【細菌担当】

衛生研究所WEBページ情報(その39)

横浜市衛生研究所ホームページ(衛生研究所WEBページ)は、1998年3月に開設され、感染症情報、保健情報、食品衛生情報、生活環境衛生情報等を市民にわかりやすく提供しています。

今回は、2007年4月のアクセス件数、アクセス順位及び2007年5月の電子メールによる問い合わせ、WEB追加・更新記事について報告します。

なお、アクセス件数については行政運営調整局IT活用推進課から提供されたデータを基に集計しました。

1 利用状況

(1) アクセス件数 (2007年4月)

2007年4月の総アクセス数は、206,740件でした。主な内訳は、感染症67.6%、食品衛生12.5%、保健情報6.4%、生活環境衛生1.7%、検査情報月報4.8%でした。

(2) アクセス順位 (2007年4月)

4月のアクセス順位(表1)は、「ロタウイルスによる感染性胃腸炎について」でした。

おなかにくるかぜで、小児を中心に流行します。

第2位は「性器クラミジア感染症について」、第3位が「マイコプラズマ肺炎について」でした。

表1 2007年4月 アクセス順位

順位	タイトル	件数
1	ロタウイルスによる感染性胃腸炎について	14,280
2	性器クラミジア感染症について	8,033
3	マイコプラズマ肺炎について	6,947
4	EBウイルスと伝染性単核症について	4,625
5	ヘモフィルス-インフルエンザb型菌(Hib)感染症について	4,301
6	サイトメガロウイルス感染症について	3,930
7	大麻(マリファナ)について	3,283
8	トキソプラズマ症について	2,347
9	手足口病について	2,320
10	食品衛生情報 ちょっと専門的なデータシート	2,301

データ提供: 行政運営調整局IT活用推進課

(3) 電子メールによる問い合わせ (2007年5月)

2007年5月にホームページのお問合わせフォームを通していただいた電子メールによる問い合わせの合計は、8件でした(表2)。

表2 2007年5月 電子メールによる問い合わせ

内容	件数	回答部署
麻しんワクチンについて	2	衛生研究所
ヘモフィルス-インフルエンザb型菌(Hib)ワクチンについて	1	衛生研究所
予防接種の効果について	2	衛生研究所
MRワクチンについて	1	衛生研究所
免疫とワクチンについて	1	衛生研究所
職員募集について	1	衛生研究所

2 追加・更新記事 (2007年5月)

2007年5月に追加・更新した主な記事は、9件でした(表3)。

表3 2007年5月 追加・更新記事

掲載月日	内容	備考
5月 7日	肺炎球菌感染症について	更新
5月 7日	ヘモフィルス-インフルエンザb型菌(Hib)感染症について	更新
5月 8日	横浜市感染症発生動向調査全数情報(平成19年4月分)	追加
5月23日	横浜市内における麻しんの流行に伴う休講等の報告 ^{*1}	追加
5月23日	第14回 衛生研究所展 - ミニセミナーのご案内 -	追加
5月31日	高病原性鳥インフルエンザ(HPAI)の発生状況	更新
5月31日	学校伝染病について	更新
5月31日	人間への感染が見られたA型インフルエンザウイルスの亜型について	更新
5月31日	横浜市感染症臨時情報【麻しん(はしか)の流行について】 ^{*1}	更新

^{*1} :2007年15週(4月9～15日)から南関東で麻しん、成人麻しんが流行し、横浜市における流行上状況を更新しました。

【 感染症・疫学情報課 】